

創立50周年記念式典にあたって

「式典」を『広辞苑』でひくと「儀式典礼」とある。『新明解国語辞典』には「組織体が主催する、規模の大きな式。〔主として節目ごとに行う〕」とあって、いずれも、そうそう経験することのない非日常的な場と時間であることをいっている。となれば、開式前からの、また式間の静寂等々、式典に相応しい緊張感をもって臨むことが皆さんに求められる。

「50年目ともなると、そろそろ伝統校と呼び習わす頃合いかと思ひます。」と『校長室から10』に書いた。光陵をつくりあげてきた卒業生やかつての職員の思い、そして50年という重みを、私たちはきちんと受け止めなければならないと思う。一方で、ようやく50年にいたったという感もある。そこで「伝統校」や「伝統」という語なのであるが、その実態はというと、どうも判然としない。以前も引き合いに出したが、『新明解国語辞典』は「伝統」を「前代までの当事者がしてきたことを後継者が自覚と誇りを持って受け継ぐところのもの」と説明している。これを基にすると、これまで刻まれてきた道標を踏まえつつ、進取の気概をもって新たな一步を印していくことが現在の光陵にある私たちの務めではないかと思ひます。記念式典にあたって生徒の皆さんに語りたことはたくさんあるのだが、挨拶の時間には限りがあることから、ここに次の三点を提示しておくこととした。

第1点は継承と発展。前号で2つのシンボルマークを紹介した。その1つは襷リレーをモチーフにしたものだ。これまでの光陵生もそうであったのだが、皆さんは襷を受け取り、次の光陵生に繋いでいく役目を負っている。探究することを大切にする光陵の教育は、いわば中長期的な展望に因り生徒の大きな成長を期するものである。短期的に解決せねばならないことに囲まれる現在の高校生にとって、短絡的な答えの獲得ではなく、自ら課題を立てて探究の方法をも学ぶ、このことに立ち向かうことが困難であることを、私たちも十分に承知している。「努力は才能!」、目標は一人ひとり異なり、ときに苦しくとも最大の努力を重ねていくことにより達成できることであり、このことをめざし、繋いでいくのが光陵生の光陵生たる矜持である。皆さんの真摯な姿勢を認める。さらに高めていこうとする意志が、次へと繋がれていく基であることを心得あれ。

第2点は高校生としての意志と品位。近隣の方や来校の方から、「生徒がよく挨拶してくれます」と褒めていただくことが多い。その都度、「とてもステキな笑顔でしょ」と返すことにしている。もう1つのシンボルマークは「光陵高校の歌」をモチーフとして、50という数字を青と緑に塗り分け、中心に権太坂を描いている。爽やかな青と緑の色づかいだ。白く描かれた権太坂は、なじみある景観であるとともに、坂を上っていこうとする光陵生の意志が表されていると私はみた。爽やかでステキな笑顔、高校生としての品位をこれからも大切に、さらに磨きあげてほしい。

第3点は「心やさしき社会のリーダー」である。

やさしさとは、人をいつくしむこと、そして強さだ。

もちろん持って生まれたやさしさや、これまでの過程で身につけたやさしさもあると思うが、私は皆さんに、光陵でさらにやさしさを身に具えるよう努めてほしいと思っている。

やさしさの対極には、他者の痛みを解かろうとせず、相手の心身を容易に傷つける、そのような姿が想起される。無知は偏見、あるいは、一面的で狭量な尺度でしかみることのできないことに因る傲慢さを生み出す。大切な皆さんには、そのような状況に決して陥ってほしくない。だから、偏見や傲慢さに陥ることなく、他者の思いや痛みを受け止めることのできる人となるため、懸命に勉強に励み、大いに学校行事や部活動に勤しんでほしい。

社会のリーダーというのは、政治や経済の舞台だけでなく、友人間、あるいは家族間など、人と人がともに暮らしていけば誰もが置かれることになる立ち位置でもある。その際、意を決して判断し、危険から逃れるため、あるいは幸せに向かうためにとる言動にリーダーシップが表出する。

目標は人それぞれであって、そこに優劣などは存在しない。高い目標を持って、他者にやさしく、自分の言動に責任を持つことのできる、心やさしき社会のリーダーをめざしてほしい。